

令和4年度第2回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

- 1 日 時：令和4年10月18日（火） 13：30～15：50
- 2 場 所：オーテピア4階 研修室
- 3 出席者：
〔委員〕加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員、常世田委員
〔オーテピア高知図書館〕山崎高知県立図書館長、高石高知市立市民図書館長（ほか）
- 4 議事次第
（1）開会
（2）議事

①オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

〔資料1～5〕

②協議

- ・多文化サービスの取組状況について
- ・図書館利用に障害のある人へのサービスの取組状況について

〔資料4、6〕

【委員】

ただいま事務局から説明があった内容について、委員の方々から意見をいただきます。

【委員】

●研修動画の充実。資料1

かなり充実してきているというのは実感している。私も時々眺めて、結構楽しんでる。この研修動画の使い方について、見てくださいというのが最初だが、市町村の職員に単独で見てと言っても、なかなか見る踏ん切りがつかなかったり、動画の中にわからないことがあったりというようなこともあり得る。見てくださいだけでなく、これを教材にして、オーテピアの職員が教えてあげるような場を作ってみるのもいいのではないかと思っている。それは、ここでやるというよりも、例えば須崎あたりで周りの市町村の職員にも来てもらって何人か集めて、今回はこういうようなことについて勉強しましょうと、教材としてこの研修動画を使う。動画は一本でなくてグループになるようなものを何本か見てもらう。それをオーテピアの職員が出かけて行って、解説&質問があればお受けしますというような形で実施するやり方だと、職員の方の負担もものすごく軽くなると思う。提供するものはもうこの動画でほとんど提供できてしまう。我々にとっても非常に楽し、市町村の職員にとっても動画で見てその中から疑問点を聞くという方法だと、かなりわかりやすいし、プラス、その質問によって自分なりに深めることができる。これは多様な使い方の一つの方法論だが、そうい

う意味合いで、色々な使い方ができると思うので検討してもらって、市町村の底上げに、ぜひこれは有効に活用していただきたいと思う。

●県立学校図書館への団体貸出しの考え方について。資料の2の3ページ

学校のニーズに合わせるというやり方もあるが、これが絶対にいいとは言わないけれども、学校の図書館の中に、県立図書館コーナーというのを作ってもらうことはできないだろうか。そこに100冊でもいいし200冊でもいい。鳥取県立図書館の場合は実は500冊ぐらい送り込んでいる。1学期に1回、25冊ワンセットを20セット送り込んで、新しい棚を作るセットの選択を学校図書館に任せるというやり方をとっている。これを実施した大きな理由は当然学校図書館に新しい本を買う予算がそんなに多くはない。鳥取は1年間に100万円は予算があるが、それでも一度に本が変わるわけじゃないということもあって、今言ったような、25冊×20セットを送り込んで、1学期に1回変えることで1年間に1,500冊の新しい本が、登場する。これは子どもたちのためというのもあるが、県立図書館が直接高校にサポートしていることを、目に見える形で提供するということ。

使ったことがない人は、県立図書館なんか、何の役にも立ってないと思うことがしばしばあるので、いやそんなことはない、自分の高校を見てみるというような感じで、高校に行ったらちゃんと県立図書館がこういうような形で年間1,500冊提供している。これはすごい数だよ、学校が買うようなものもセット化して提供してるということをちゃんと知っておいてね、という意味合い。

高知県立図書館の場合で言うと、資料費の1億円をどうやって守るかという流れの中の一つの考え方、それから、学校に司書が配属されたときにどうやってこの人たちに活躍してもらうかという、両面から見たときに、こういうやり方ができる。だから学校側のニーズに合わせて、これが欲しいというところには提供するという考え方もあるが、今みたいな考え方もあるのでその辺を少し考えてもらいたい。全部の学校が一遍にできないのであれば、我々はこういう考え方を思ってるんだがどうだろうかという形で、賛同してくれるところからの参画でもいいと思う。

●ウェブページ。資料2の1ページ

アクセスがすさまじく伸びているというのは、誠に、結構なことだと思う。

●パスファインダー。資料4の2ページ

パスファインダーについては、できるだけ早くたくさん作っていただきたい。理由はオーテピア高知図書館のパスファインダーができると、市町村はそこに自分のところが持ってる資料を書き込むだけで、各市町村専用のパスファインダーができるので、それを狙いたいと思っている。

オーテピアが持っている本、信用できるウェブ・サイト、相談機関というような情報のパスファインダーをオーテピアが作って、若干のスペースのところに、

各市町村が持つてゐる資料にはこんなのがあります、あるいはうちの近くではここに相談されてはどうでしょうかというのを付け加える。そうすることによって、どんなに遠いところの図書館でも、オーテピアのあれも使えるし、うちのこれも使えるしという意味合いのオリジナルのパスファインダーができていく。そして、そういったパスファインダーが、それぞれの図書館の前に並べてあるという形になってくると大いにオーテピアのPRにもなる。

情報提供の面で情報弱者を作らないように、特にこのパスファインダーの場合、優先的にやるのはどちらかというとビジネス支援よりも相談しにくい案件、例えば離婚とか多重債務とかひきこもりだとかが優先される。要は司書にちょっと言いにくいようなこと、相談しにくいようなことのパスファインダーが、表に並んでいて、ここには本はこういう本がある、相談するならここなんだということを、パスファインダーを手にとることによって、司書に相談しなくても、その図書館から情報が手に入る。相談しにくいような案件についてのパスファインダーのようなものが、きちんと提供されることによって、それこそ全県一体となって、情報弱者を作らない姿勢を示せるのではないかと思う。

●ビジネス支援サービス。資料4の3ページ。

「県計画支援課と連携しSDGs推進セミナーでブックリストの提供及び出前図書館の実施」について、これは報道されたのか。

●健康・安心・防災情報サービス。資料4の4ページ。

成果と課題のところの、①の一番上で専門機関が、展示資料を選定することで利用者に信頼性の高い情報の提供ができたというもの。この方向はとてもいいと思う。樂をしましょうという意味で、図書館が一生懸命資料を選ぶのもいいんだけど、やはり餅は餅屋で、特殊な分野、専門的な分野のことについては、できるだけ専門家の意見や専門家の方から、これとこれとは是非とも入れておくべきだよというような意見をいただいて、展示するような形をできるだけ組みたいと思う。そういうことによって向こうの方もオーテピアに我々は貢献しつつ、情報も提供してるんだという、ある意味満足感も提供できると思うので、ぜひこの方向は進めていただきたいと思う。

高齢者支援課からブックリストの配布希望、作成依頼があり作成提供したという、これもとてもいい。どこかと連携する時に、ぜひこういうのを作って欲しいと言われて作って提供して、連携先の人たちが一生懸命配ってくれる仕組み。彼らも、その必要性、役立ち感をよくわかってくれた上で、配るということになるから、彼らも資料について説明できる。情報弱者の手元に直接情報が届くという意味合いで、こういう組み合わせは本当にいいと思う。

来館が困難な方のために、アーカイブ動画を作成したことについて。本当に動画の使い方としてはとてもいいと思う。単純に動画を提供するだけじゃなくて、この動画を使って、誰かが実際に会としてやってくれるようなのも、ありだと思う。この場合は必ずしも図書館員でなくともいいと思う。こういうことに関心のあ

る方は結構いると思う。そういうような使い方で、ぜひ広めてやってほしい。このようなことをやってみたいという方に、材料として動画を提供しますのでぜひやってみてくださいね、必要に応じて、それに適した本や資料も提供できますよというような形。うまく結びつきができて一緒にやろうという雰囲気が出てくると、とてもいいと思う。

繰り返しになるが、動画は単純に「それを見てください」という以外の使い方が、案外有効だと思っている。ニュース映像として載っているのを勝手に見てくださいというのも悪いわけじゃないが、研修や講習の場面でちゃんと解説が付いて、これはこういうことなんだと言われると、なるほどと、全然効果が変わってくる。そういうイメージを持って、ぜひ動画の活用を進めてもらったらと思う。

●行政支援サービス。資料4の5ページ。

こうち人づくり広域連合及び県人事課主催の新採研修に活用講座の動画を提供とある。こういう使い方だと思う。

●市町村立図書館等への支援。資料4の11ページ

課題解決支援サービス実施への協力について、協力のレベルはすごくいろいろなバージョンがあると思う。市町村立図書館の方は多分あまりよくわからないままにスタートさせることがあるので、向こうの関わりや専門性をどの辺で考えるかによって、いろいろな課題解決支援サービスへの協力の仕方があると思う。我々は何が提供できるのか、その中で、あなた方が使うとしたら例えば「これとこれを使ったら、あなた方はこの程度の負担でこういうことができる」ということを伝える。そして彼らが想像したり想定したりしながら、じゃあとりあえずうちの今だったらこれをやってみたいと思うというような、そういうレベルに応じて選択が可能な支援のあり方。市町村立図書館の方が理解しやすい、じゃあうちは、という言葉ができるだけすぐ出てくるようなハードルの低いものから、だんだんと難しいものまで、いろいろな協力の仕方がありますというようなのをどう理解してもらうか。それは、課題解決に限らないのかもしれないけれども、やはり市町村のレベルだと思う。

市町村図書館のレベルは千差万別で、そここのところのニーズにしてもそう。そういう部分を考えると、本当に簡単なところから、お互いに頑張ってやりましょう、最終的にはマスコミにでも載せてもらいましょう、みたいなところまで、いろいろな支援があると思う。支援の内容をできるだけ市町村図書館が想像しやすいような、何がしかの資料なりツールなりを持っておいた方がいいのではないかな。例えばこちらの担当が変わったり、何かのついでに誰かが話すときに、自分がわかってなくても大体これの資料を見たら、お互いにこちらが提供できるものはどんなものがあってそれを使ったらこんなことができるっていうようなことが、説明できる、理解してもらえる、何がしかのツールがあったら嬉しい。

●高知市全域サービスの拠点。資料4の12ページ。

学校図書館との連携は、できなかったことも記載してあるが、図書館支援員だけでなく教職員に対しての利用促進を図る取り組みが必要という点。これはすごく大事だと思う。教職員が本気で図書館を使うのはこんなに有効なんだっていうことを、どれぐらい腑に落ちてくれるか、腹に据えてくれるかによって、学校の利用は変わる。例えばそのクラスや自分が担当する学科の中でぜひこれだと、教員が言ってくれるような状況ができれば、そのクラスは多分劇的に変わってくる。そうすると逆に教職員が使ってみて、本当にこれだと思ってくれない限りはそういう言葉は出てこない。学校に行くのはなかなか難しいとなると先ほどの話で動画を使って、場合によっては説明する人もリモートでということもありだと思うが、できれば説明者は向こうに行くぐらいのほうがいい。そういう形でリアルとリモートを上手に使いながら、学校、1所属に対して活用研修ができる。1回でできるかどうかわからないので、何回かに分けてもいい、今言ったりリモートで完全にやるのだったら、回数を分けたとしてもこちらのほうの負担はそんなに大きくないと思う。その辺のやり方を考えながら、できるだけその教職員が使ってみようと思うようなところに、引っ張ってきてもらいたいと思う。

●大学等の教育・研究機関等との連携・協力。資料4の14ページ

大学のジャーナルは多分かなり高騰していて、大学の図書館はもう今頭を抱えている状態だと思う。円安の影響で、元々が1億円程度かかっている費用の40%だとすごい金額になる。必要になってくる分を全部見てもらえるかというところ、そう簡単なものじゃない、となると他の書籍にしわ寄せが来るのは明らか。そこを、オーテピアがちゃんと支えますよということを再度強く発信できたらと思う。買えない資料についてぜひ買って欲しいという資料があったら、オーテピアのほうでできるだけそういったものについては揃えるように工夫しますからというようなことも含めて、資料費の1億円は有効に使っていますよと主張できる。そういう意味合いで、県内の大学がジャーナルの高騰によって教育、環境に大きなマイナスが出てくる部分を幾らかでもオーテピアが支えて、マイナスを減らす努力をしています、その元は、資料費の1億円ですという話。

大学から資料を借りるときは大学から宅急便で来るのか。宅急便の費用は大学持ちか。

【事務局】

費用は県立図書館が負担。

【委員】

そういうことをやりつつ、大学側からの提供も大きな声で言ってほしい。例えばセカンドオピニオンを得るときに大学の医学部関係の資料がすぐに手に入る状況をもっとPRしつつ、大学とこういう形で非常に強く結びつきながらオー

テピアがやっているんだというところをアピールする。ジャーナルの高騰をきっかけにして、一つ打ち出してもいいのではないかと思う。

●サポーター制度 資料5

サポート登録については期間があるのだろうか。一律でなくてもいいので期間は設定したほうがいいと思う。こういうものについてはこれぐらいの期間サポーターとして登録させていただきますというのを定めておいた方がいい。1回寄附したら永久にサポーターというのは、ちょっとおかしい話だと思う。

ボランティア活動のほうは、セミナーの運営の協力、あるいはデータを入力するようなことも結構あるのかと思う。例えばそういうものについても、サポーターの方に協力してもらうようなことがあってもいいのかなと思う。

●多文化サービス

外国人材については、日本という国自体がよその国に比べてものすごく今相対的に不利になってきている。例えば5年前だと日本に行きたいという人がすごく多かったのが、今劇的に、行きたいという人が減ってきているという状況がある。それは、我々にはどうしようもない。何年かで、変えてもらわないといけないなど、幾つか日本には決定的に弱いところがある。そのような中でも、ウェルカムの姿勢をその地域の中でどれぐらい出せるか。ここの企業に来てよかったと思ってもらえるようにする中に、オーテピアがどれぐらいそこに貢献できるかというのは結構大きなことだと思う。例えば館内の案内、サイン、そういったものも含めて、外国から来られる人に対して、オーテピアはウェルカムなんだというところを、ぜひ、打ち出していきたい。

サインや彼らの言葉による利用案内。彼らに対しての、例えば、ネットを使ったほうがいいのかもしれないが、こういう本がありますよというリストの提供なども少し考えていただければいい。ただ言語の翻訳あたりについては、一定の予算をいただくかあるいはそういったことに長けている国際関係の交流団体と組んで、提供するようなことを考えてみられてはいかがかと思う。

【事務局】

職員が精力的に作っている研修動画だが、おっしゃるように一過性のものにするのではなく、山重が持っているものすごく豊富な知識、経験いろんなものを後輩の司書たちに残すことも含めて、これからの研修の教材として活用していきたい。最終的に100本ぐらいまで作り、オーテピアの宝としてコレクションを作っていきたい。

学校図書館の中に県立図書館コーナーを作るとするのはとてもいいご提案をいただいた。県立図書館への支援は、県立学校との連携協力という資料を作成して、学校への協力支援と、生徒への支援と、教職員の支援ということを分けて、それぞれこんなことがオーテピアではできるというのを、県立学校長会等で配っている。

しかし予算面では資料費の 1 億円の中では、今までは目出しをしていなかった。来年度予算に向けては、県立学校向けと在住外国人材については柱立てをして、予算要求をしていく予定。予算要求するにあたり、文科省が調査した数字によると県内の県立高校は、全国平均よりも 1 校あたり 150 冊ぐらい本が少ないらしい。そういうことを元にして、オーテピアが少ない分を準備しましょう、という形に組み立てをしている。

パスファインダーの作成をできるだけ早くというのは本当におっしゃる通りで、オーテピアがベースになるものを作っておけば、市町村図書館が、それぞれの実情に応じた形で、加筆修正して、うまく活用していただければと思う。できるだけ早く作っていききたい。

健康安心防災情報の専門家の意見を聞いて資料提供するものについて、やはり当館の司書も専門性の向上に向けていろいろな研修を重ねているが、餅は餅屋で、それぞれの専門機関の方々の方がもっと、いろいろな情報を持たれている。向こうの情報もいただきながら、お互いに知恵を出し合って、より良いイベント、講座等ができるようにしていきたい。

ブックリスト等の活用について、心の教育センターなどブックリストの要請を受けて作った。この不登校に関するブックリストを使って県立高校が校内研修を実施した。やはり、高知県の積年の教育課題の中に不登校対策があり、これならうちでも使えるというような情報が広まっていくよう、いろいろな使い方をして広めていきたい。

健康安心防災情報担当が作っているアーカイブ動画について、ご指摘の通り、ただアップするだけでなく、例えば高齢者施設等で、みんなで音読しましょうという時にアーカイブ動画を使っていただくなど、こういう使い方ができるということを、関係施設にも周知していきたい。

市町村支援の課題解決。それぞれの地域の課題は違っており、図書館のできる能力、マンパワー等もそれぞれ差があるので、そこに合った形で、ハードルの低いものから順次レベルを上げていく形にする必要があると思っている。

大学等との教育・研究機関等との連携・協力。これはこれからという部分もあるが、本の資料費のことも含めて、大学の持っているいろいろな知見も、オーテピアと共有させていただきたい。今各大学と昔結んだ協定の見直しもしているところだが、四年制大学だけではなく専門学校、短大等いろいろなところと連携を進めていきたいと思っている。

サポーター制度について、期間は設定したほうがいいと思っている。一度設定したボランティアの方々に、すでに活動する意思がないのに登録だけしていることになっていけないので、一定の期間設定が必要かと思っている。

【事務局】

高知市の全域サービス。学校図書館との連携について、市民図書館は学校での児童・生徒への支援、教職員の支援等いろいろあるが、児童・生徒への支援では、長年、団体貸出しも含めて実施してきた。高知市では国の補助金がなくなっても、

学校図書館支援員を各学校に置いているので、まずはそちらへの支援、事業の内容を検証の中で深めてブラッシュアップしてきた。教職員に対しての利用促進は、ある意味行政の仲間として、先生そのものの仕事はどう図書館が関わっていくかという部分がなかった。そこで、これをやっていかなければならないのでこれから進めていく。現場の方がどういうふうにやったらいいのかというベースは作ったので、これを効果的に、本当に利用できるものだとわかってもらうのが、大きな課題だと思っている。校長会で説明をしていくのはもちろんだが、校長会で情報が止まったりもする。だからその先で、現場に行って説明する、リモートとリアルを使ってみてというアドバイスを参考に、現場の先生にどう伝えていくかということを考えていきたい。

研修動画については、高知市の立場では分館・分室職員も同じシステムを使う、仲間と同じようなサービスをしてもらっている。毎月の研修では「基礎の基礎研修」をやっている中で、研修動画も使用していくなど、これからずっと続けていくものなので、有効に使っていききたい。市全域のサービスのほうでも、技術やサービスの安定化を図っていききたい。

【委員】

●委員会のあり方

目標をかなり達成してきたので、次の段階のより細かいところに話に移り始めているんだなという気がする。これからは、非常に大枠な、大きな政策の部分と、それから個別の業務やサービスのより細かい部分の見直しということに、この委員会の役割が移っていくのかと思う。そうすると、ここに座って協議しているのでは済まなくなってきた、もう少し現場に行って、委員も現場を確認し、あるいは細かい数値を各担当の方に要求をして、より細かい分析をしていくという段階になるのではないかと考えている。

●目標の見直し。資料3

ここに挙がっているものはすべて目標値を大きくするという、非常に素晴らしい状況にあって、目標値を小さくするものについてはここに出てこない。電子書籍とかその辺は後のほうに回ってるわけで、問題はやはり目標値に大きく届いてない部分、データベースや電子書籍。電子書籍はニーズに合ったような、電子書籍がそもそも出版されないという日本の出版事情がある。これは図書館側ではどうしようもない問題で、これが欧米の図書館と全く状況が違うということなので、これはちょっと簡単には済まないかもしれない。

データベースについては、例えば大阪市立図書館などは、利用者に対する利用講習会を非常に頻繁にやったことによって、利用者の利用率が上がってきたという事例もある。その辺を努力いただけたらと思っている。

心配なのは、目標達成率がかなり高くなってくると、ここまで全力で走ってきて、疲れも溜まってきて、ちょっと一安心というところで、ちょっと気が抜ける時期がそろそろ来るのかと思う。ある部分については、あぐらをかいてしまうと

ということが起きてくるのではないか。これは有名な図書館になった多くのところが陥りがちな、現象だ。数値が安定し、高止まりになってくると安心してあぐらをかいてしまう。だからそうならないような工夫が必要かと思っている。

●PDCA

このPDCAサイクルがそこそこ機能してるという点で言えば、この報告書関係の資料だけでも大変貴重な資料だ。先輩たちがこういう形でちゃんとチェックを繰り返していたんだと後輩の人たちに受け継がれていけば、非常に重要な遺産になるだろう。こういうものを活用していただきたいと思っている。

前回あたりから話しているが、県立図書館の部分については、県立図書館のあり方というものをきちんと確立していくというのが、オーテピアの大きな目標の一つだったが、かなりいい状況に成果が出てる。

●高知市民図書館の分析

並行して、やはり高知市の市立図書館の担当分野のところについての分析が必要だ。これについては前回もお話したように、市内在住者のみの貸出冊数の数値をきちんとコンピュータのデータを分析して、数値を出す必要があるのではないかとっている。

オーテピア全体の貸出冊数と、市民図書館の分館・分室・移動図書館の貸出冊数をざっくり足して、市民1人当たりで計算すると7.7ぐらいで人口30万都市にしてはかなりいい数字が出ている。これは県立図書館の他の地域から来た利用者の数字が入っているんで、市内利用者だけで計算すればもう少し下がることになると思う。それがどのくらいまで下がるのか。7ぐらいで止まっていれば、かなりいい数字だが、6ぐらいになってしまえば、全国平均並みということになる。人口同規模自治体と比較すると、もう少し高い数値が出てこないと良くないのではないかな。

オーテピアのバックアップによって分館・分室のサービスが高まっていけば、分館・分室の利用率も高まるはずだということがあるので、その辺の分析がもう少し必要じゃないかと思っている。市内の、例えば多文化サービス、障害者サービス、小中学校の支援についてどのくらい効果があるのかという分析も必要だろう。

●合築の効果

合築の効果が、非常にこれから分析のキーポイントの一つになってくると思う。建前上は、県立図書館の業務と市立図書館の業務は、違ってはいるわけで、それぞれの職員がそれぞれの理念に従った仕事をしないといけない。しかし、土日の出勤については、これだけの規模の図書館を支えるとなると、直接サービスのところで県立の職員の方も交代で出てこないといけないだろうというようなこともある。そもそもバスター研修のようなことの効果は、よく言われているわけ

なので、試験的に県立図書館の職員が高知市民図書館の分館に 1 年ぐらい行ってもらうなど、いろいろな試みもこれから少しずつ考えていっていただきたい。

米国などでは図書館システムはカウンティー単位で構成されることが多い。これは大体日本の県単位に当たる。その中で館種を超えたネットワークができている。今回の報告に大学図書館との連携もあるが、もう少しきちんとした、図書館同士の連携の仕組みを、県立が政策的に進めていくのが、これから大きな役割として出てくるのではないかと思う。

●多文化サービス

特に高度に知的な業務で日本に来る方達は問題ないが、いわゆる技能実習生のような形で来る人たちに対する対応という点では、この資料でもかなり力が入っている。今の技能実習制度ということ自体がダブルスタンダードで、かなり人道的な問題がある側面を持っている。オーテピアはその建前として、この技能実習生の制度の建前的な部分を維持するため、闇の部分で補完するような形で支援していくのか。それとも技能実習生という形で日本に来てひどい状態にある人たちを少しでも、人道的に救う立場でサービスをしていくのか。これはやはり図書館の倫理として問われるのではないかと思う。後日どちらが評価されるかと言えば、当然人道的な支援が評価される。しかし、一般的な行政は建前的に、その闇の部分を含んだ人手不足を補完するような形で、都合のいい使い方の制度を補完しようという形で動く。その辺のモラルの問題は、特に専門職の方達はどう位置づけるのかということ、考えていく必要があるだろう。建前的には行政の、法的な立場で動くしかないが、しかしその裏で、図書館のユネスコの図書館宣言にあるような本当の図書館のあり方という形で、そういう人たちをちゃんと救うのが、やはり図書館員としてのモラルを問われていると思っている。

●建築的な懸念について（屋外エリア）

今日、図書館の周りを見させていただいた。外見について北側の木製部分の壁面の防護材の表面を防護する塗布剤が完全に剥離をしてしまって、木材部分が、露わになってしまっている。しかも大分風雨で物理的に劣化が始まっている。これは早急に修理する必要があるのではないか。特に、北側のベンチは非常に悲惨な状態になってしまっている。南側はそれほどでもないが剥離がかなり進んでいるので、これも早めに修理をするべきと思う。

自転車置き場で北側の自転車置き場にもスチール製のありきたりの物置が設置されていて、これが全体のデザインをぶち壊しにしている。こういうところをちょっと考えないといけないんじゃないか。北側の東側の方に置いてある小型の物置はちゃんと木製のデザインに気を配ったようなものが置いてある。だから余計スチールの物置のおかしな不具合が目立ってしまうので、これだけデザインに気を使ってる建物なので、そういうあたりも気をつけていただけたらと思う。

南側の植栽の部分に自転車を置かれないようにしてるところの、カラーコー

ンに黄色と黒のバーで禁止をしてるようなところも本当に全体の雰囲気をごちゃごちゃなので、その辺はやはりもうちょっと、気の利いた形にしたい。

建物内部は静寂読書室の中で空調の音がある。これは今から直すのは難しいと思うが、外の閲覧室の方が静か。静寂のはずの中に入った方が空調の音があるというのは、うーんという感じがした。

●建設的な懸念について（屋内エリア）

報告書でもパスファインダーの重要性が述べられているが、パスファインダーが入っているパンフレットが非常に片隅の方に追いやられていて全く目立たない。これはもうちょっと目立つところに出すべき。

以前にも指摘した箇所で、南側の周回する回廊がやはり暗い。人がなかなか歩かないところでブラインドが閉まっていることで暗い感じ。あそこの活用をどうするのかというところも一つポイント。ブラインドについては午前中なのに西側の方が下がっている。日差しが変わってくることによってブラインドを開け閉めしないといけないが、ここまで手が回っていないのか。こういうことは、タイミングが異なるので現場の自主的な判断力が問われる。季節によって開閉するという工夫もいるのではないかと思った。

●視聴覚コーナー

音楽CDのための席があるが、この辺の利用率はどうか。音楽を図書館に行き、機械に入れて聞く人がいるのか。空間は貴重だ。映像のブースも非常に場所を取るが、果たしてどのくらいご覧になる方がいるのか。

視聴覚のコンテンツとしてはいわゆる劇場映画が中心になってしまうが、日本図書館協会が以前、映像コンテンツ提供事業始めたときの理念は、いわゆる映画史に残るような芸術上重要な作品をきちんと見られるような環境を整備することなので、決して娯楽作品のみを提供するということではない。今でも各種業界用の映画、建築系の映画や技術的な技術映像などいろいろな短編映画がある。それから岩波映画のような、非常に過去のものだが価値があるものは全然見る機会がない。こういうものこそ図書館が集めて提供すべきじゃないかと思うので、その辺の取り組みはどうか。

●ラーニング・コモンズ

ラーニング・コモンズをもうちょっと面積を大きく取るべきだったが、オーテピアは残念ながら十分に取れていない。欧米の図書館では今、全面的にラーニング・コモンズの面積を取るような変革が行われている。これはやはり電子書籍の提供率が増えてきたので、紙の資料の数を少し減らすことが可能になったという結果ではないかと言われている。これは交流空間に人に来てもらって、そこに情報提供を側面からしていくという構想。

まだできて間近だが、このオーテピアの中でそういう交流空間の確保をどうしていくのかということも、そろそろ検討する必要があるのではないか。

【事務局】

議論のあり方について、昨年度までは第2期計画を策定するという大きな方向性を決めていく部分があったので、毎回ごとに計画の中身について議論、意見をいただいたが、今回から少し議論、会議の持ち方も変えている。できるだけ若い人たちに、直接、先生方の前で発表させるというようなやり方になっている。

市町村立図書館、県立、高知市の分館分室、今後そういった細かいところの部分、個別の指摘に対してどういうふうに対応していくかということも大事になってくるので、今度から現場へ出向いていっていただくとか、会議の仕方も再考していきたい。

データベースについて、非常に利用率の高いものと、そうでもないものがある。そこをどういうふうに利用率を上げていくかというのも一つの課題。1年ですぐ切ってしまうのは良くないので、3年ぐらいそのデータベースを提供してみて、いろいろなPRをしてもあまり利用率が上がらないのであれば、違うものに変えていく必要もあろうかと思うが、まだまだやはりPRが足りてないと痛感している。講習会なども、もっともっと増やしていけたらいいと思っている。

今年5年目で節目だが、数値的な成果も一定出してきて、職員が一安心するところでは、私も非常に懸念をしている。進化型図書館にしていくのはもちろん資料費も大事だが、資料費1億円を確保できたら自動的に進化型図書館になるわけではなく、進化型図書館にしていくのは、あなたたち司書だと、いろいろなヒアリングの時には、叱咤激励もしている。館長である私自身も含めて職員一同が常にアンテナを高くして、錆びないように磨きながらやっていく必要がある。

合築の効果について、オーテピアは今も県外の議会など、いろいろなところから頻繁に視察があり、合築の効果はどうかということをもまず聞かれる。いろいろ今でもやはりそれぞれの県市の文化の違いがある。事務処理的なことや、例えば人事管理制度も県市の職員で違うが、そこはお互いに、情報共有できるところは共有をしながら、歩み寄れるところは歩み寄りながら、お互いの違いを認めていく努力も必要だと思っている。図書館としては、数字が物語っているように、合築は成功したと私は思いたい。

外国人材については、県の戦略的に、外国人材の確保というものがあるが、図書館はやはりモラルや人道的な支援という観点があるので、一定気をつけながら図書館ができることを取り組む。図書館は多くの資料と情報を持ちえている。高知に来る外国人の方々が、情報弱者にならないように、それと外国人だけでなく、外国人材を取り巻く支援をする人、雇う方などそういう方々に、例えば、外国人の雇用に関する情報をきちんと提供していく役割を果たしていく。そうすることで外国人の方が暮らしやすい、生活しやすい高知に貢献できたらと思って、今、取り組みを進めている。

【事務局】

建物の北側のご指摘はいつも感じており、定期的にメンテナンスをしないと、綺麗さが保てない。汚く、さびれた施設に見えると感じている。補修等は予算を伴うので、磨いたら綺麗になるのではないかと話をしたことがある。どの程度費用がかかるのかということを確認した上でやっていきたい。細々した修繕は結構入っており、今、財政が難しい中で不要になった予算は返して欲しいという話もある中でどこまでできるか見極めが必要かと思っている。ステンレス製の倉庫は、市の街路市の関係との話で日曜市の備品を入れる倉庫を置いている。

【委員】

行政マンというのは、建物の外観などには非常に無関心なことが多い。飛行場、ショッピングセンター、駅など今どんどん綺麗にモダンになってきている。だから市民の目が厳しくなって、目が肥えてきている。それなのに図書館はどんどん傷んでいき、変な物をどんどん置いていくことが多い。利用者にとって外観はすごく重要で、外からどう見えるかというものをきちんと意識していただきたい。大体職員は家と職員用通用口しか往復しない。周りを見ることはあまりない。だからぜひ、周りのチェックをしていただきたい。

【事務局】

汚いところになると、ごみを置いて行かれることも考えられるので、そこは公共施設として、美観を保っていきたい。

合築の効果について、市民図書館本館として山崎館長と同様に感じている。一方で、高知市の市民図書館としての機能はどうかという点。高知県の中にある高知市なので、県立図書館において連携等で取り組むものに効果が出始めたら、高知市にも効果があるのかといえ、そうかもしれないが、細かいところでは、本当にどこまで効果が出ているのかが、すごく気になっている。例えば行政機関と連携する機会があったときに、その中に高知市も入っている。こういう会を連携してオーテピアとやるようになったというのを高知市行政機関の直接の担当者にも伝えておく。その点を意識して関係課の担当者にも言っていたかないとわからないだろうから、そのあたりは、連絡をするように指示をしている。

数値的な効果について、分館・分室だけの数字を出すなど。貸出し冊数は市単独だったときは5.何冊かだったと思うが、それが7冊程度になっているとは思っていない。やはり高知市民図書館としての分析が必要かと思っている。前回もご指摘をいただいた点だが、具体的な方策はまだ立てられない状況なので、そこは進めていかなければならない。

視聴覚資料について。基本的には郷土に関するものやバリアフリーに関するものは、県立の方も購入しているが、通常の視聴覚資料は高知市の方が、資料費8,200万円の予算のうちの約200万円が充てられていた。当然資料の収集基準に基づいて収集している。

【事務局】

収集基準に基づいて、映像資料、録音資料とも、高知県及び地域に関する資料、高知県出身の作詞、作曲家、歌手等により作成された資料をまず優先的に購入している。視聴覚資料自体が、バリアフリー資料とも言えるので、朗読CD、映像資料でしたら日本語字幕や、音声ガイドのついたバリアフリー資料を優先的に購入している。また、各課題解決支援サービスに関する実務的なものの希望があれば収集している。

【事務局】

センターの役割として、コレクションではないが、もしかしたら貸出しはそんなにないかもしれないが、必要な情報という観点で購入をしているものは少ない現状となる。

【委員】

●指標

オーテピアを作る前から重要な案件は指標。予算を取って施設を整備して資料費を構えて運営していくという観点からすると、外部から非常にわかりやすい指標ということが重要視される。これは当然で、実際、1期の評価や2期の目標という観点からの指標も一般的なものを全面的に出して、成果を定量化することが、ずっと行われてきている。

当初から進化型図書館として質的な話がある。特に両委員もずっと強調されている、例えばレファレンス・サービスの意義がある。問題解決型なのか、レファレンス・サービスなのかどうか。例えばそういうところを問われたときに、やはり量的な話もある。事務局からお話もあったが、非常に簡単な問い合わせは少なくなったので件数が減った。これは、例えば情報リテラシーであったりあるいは館内の案内であったり、あるいは、利用者の意識の向上であったりして、非常に簡単な案内が減ったとしたらそれはいいこと。数は減ったんだけど、1件1件のレファレンスが利用者にとって非常に有効なものになっている。引いては、県市全体の様々な面、当初の目標にあったような産業振興、雇用、健康、安全、安心とかそのあたりに繋がるような、非常に質の高いレファレンスが展開されているということは、何か言えたらいいと昔からずっと思っている。少なくとも1期の間は、そういうものをきちんとした形で提案できていないが、2期の間に、何か指標の進展みたいなものが置けたらいい。

今この資料自体がもうその構図を体現しているが、拡張と拡大がある。拡大部分が資料2にあるような指標で示されていて、拡張が資料4に書き込んである。進化型図書館だから当然、拡張の部分は非常に重要で、そこがどれだけ進展していくかは非常に重要なところ。拡張する中でそのうまく拡張できていったところは、拡大部分に取り込んでいって、指標として見える化をしながらさらにその次へ行くというのが、発展する組織として理想的。

このような観点からすると、日本の図書館が世界から大分、置き去りにされているという話を昨日、両委員から伺ったが、その中で単にオーテピアだけではな

く、少なくとも日本の図書館が世界を追いかけていく時の目標指標みたいなのが、2期の間に何かオーテピアで提案されていければ、さらなる図書館全体の発展に繋がるのかというのが、私個人の2期の目標。

●職員

職員について特にオーテピアに限定しなかった場合は非正規職員の問題がある。特に県立図書館は市町村支援をする時に、受け皿となるべき市町村図書館が、残念ながら非正規職員だけで構成されてるようなところもある。

その中で、例えば、今までは研修とかをやっても3年ぐらいで交代されてしまう事情があるのでなかなか浸透しない。それはオーテピアの責任でも何でもない。ただ逆に、日本の図書館全体が抱えている問題でもある。非常に非正規職員が多くなっていて、その方たちが雇用上のルールで5年はいられない状況になっていく。一方、そういった方々のヘルプがないと、やはり正規職員が活躍できないということがあるので、非正規職員の研修や、底上げをどういうふうにしていくのかというのは、特に市町村支援を考えたときに非常に重要になってくる。例えば、動画シリーズとかも非常に有効だと思う。ただ、アマチュアリズム的に言うと、やはり委員が言われたように少し研修とかしてあげないと、動画見たら勉強できます、ではなかなか、きっかけにならないのではないかとと思っている。だから、あれを見てこれだけ動画があればOKと思うのは不十分。正規の司書はあれからいろいろなことを学んでいけると思う。だが、図書館に派遣されてきました、司書資格はありますけど、以前は全然違うところで働いていましたという方に、「この動画を見たら勉強になるよ」ってやるとなかなか進展しないところもある。市町村図書館支援という観点からは、特にそこを考えていけたらいい。

●高知市の全域サービス

合築の時もずっと最初から話題になっていた。私なりの合築の意義は、県と市町村図書館との関係性が、オーテピア内部では非常に連携が強力なのであまり明確化されないのかもしれないが、分館・分室を見据えたときにはやはり県立図書館と市町村図書館との関係性が、分館・分室との関係の中で出てくると思っている。

高知市以外の市町村図書館への支援の流れとして、例えば、地域の実情に合わせた個別のニーズを踏まえた支援という話もよく出てきている。そういった視点から考えると、私個人は、分館・分室に対する関係性がもう少しローカルでもいいと思っている。特に重要な課題、例えば健康、防災は、浦戸湾に近いあたりと北側とではやはり思い入れが違っている面もあったりする。そういった意味で、いや、高知市は一体ですというのも、もちろん行政としては正しいが、せっかくこれだけ分館・分室が充実しているとするならば、そういったところをテコにして、防災や、健康、安全、安心に係るサービスなども、少し分館・分室の所在地別に対応するぐらいの流れができれば、すばらしいと思っている。情報リテラシーもそれに合わせて拡張できれば、本当はいいと思っている。

●情報リテラシー

理想論だけを言うと、図書館、各種のツールを使いこなして好きな情報がどんどん収集できるようになることは、取りも直さず、例えば電子機器、例えばスマホ等の使い方に習熟をすることになる。例えば高齢者の方からすると、コロナのワクチン接種の時のお年寄りの大混乱ぶりがあった。ネットから手続きできると言われても俺にはできないという方が多数、市役所に訪れたことが起こってしまった。

せっかくこのオーテピアと分館・分室の力があるので、そういったことを踏まえて、情報リテラシーを単に図書利用、あるいは情報収集に限定せず、行政情報、あるいは防災とかそういったものにも繋げる形での、情報リテラシーが実現できれば、さらに高知市の支援も強力になるかと期待している。

●視聴覚資料

一般的な音楽、商業映画だとすると、市の端の地域からわざわざオーテピアに来てDVD1枚借りてみるかと言われると、そのニーズはあまり多くはないかもしれないが、高知市は広いので、例えば分館・分室あたりで気軽にその視聴覚資料が利用できるのであれば、一定のニーズは多分あるだろう。

特に、専門的な例えば防災、AEDの使い方のDVD資料みたいなものは、分館・分室で見られたら非常に効果があるだろうと考えているので、そういったこともできたらすばらしい。

健康・安心・防災情報サービスもあって、オーテピア関係では、例えば研修動画のような動画を保存して展開するという事になってるが、せっかく様々な部局と連携をしているので、例えば防災の講演とかをいつでも見られるとか、結構大きいのではないかなと思っている。

●地域に応じた情報提供

分館・分室スケールぐらいで、地元の医療機関や、行政あるいは所轄単位の消防署などと連携して、ここは山がちだから、ここは海が近いからというレベルでの防災情報を提供できれば、それは非常に強力。特に分館・分室で展開すれば非常に強力なものになる。

●図書館からの新たな情報発信

最終的には、結局、図書館が何をやるかということになると、情報収集しました、よかったです、ではなかなか終わらない。それこそ、課題解決型というのは、最終的に課題を解決していかないといけないわけだが、そこには往々にして、情報発信を伴うだろう。例えばサンプリングとして、委員から紹介していただいた、ものづくりみたいなプラットフォームも、アメリカでは準備が進んでいるわけだが、ものづくりに限らず、情報発信もできたらいい。

せっかくビブリオバトルみたいなところまでは来てるので、そこに留まらず、

作品の発表、あるいは動画の作成とかそんなことまで見据えて、文化的発信というところにも踏み込んでいけたらいいというのが、私が２期でやればなと思っているあたりである。

【事務局】

レファレンス・サービスについて。説明の中で、所蔵のレファレンス件数が減っていることを申し上げたが、お話を伺い、確かにその件数自体もちろん大事だが、中身が重要だと感じた。質、工夫、オーテピアのレファレンスによって、例えばビジネスに繋がったものとか、いろいろな質の高いレファレンスができているものの中にはあると思うので、もう少しその中身を分析して、良いものはPRに使っていききたい。

市町村図書館にも非正規職員の方々が非常に多く、それも人数が限られているので、オーテピアでの集合研修などには出にくいということもあって、動画の研修を作っている。フェイストゥフェイスでやる研修を軽視しているわけではなく、物によってはやはり出向いていく、訪問していく研修もあれば、集合研修もあり、隙間時間にいつでもどこでもできる動画の活用もありという形で、いろいろな研修を組み合わせたい。

最終的に図書館が何をするか。課題解決。それと情報発信ということについて前回の委員会で少しご説明したが、DX。これからもデジタル化ということだが、デジタル人材が地方にどれだけいるかということ、そういった人材をどれだけ確保できるかということが、おそらく課題になってくる。すぐには解決できないが、そういった人材を県内で育成、発掘していく機運づくりに繋がればということで、今年度YAMAKIN株式会社と連携し、デジタルデザインコンテストを開催する。

あの手この手で、オーテピアはこんなこともあんなこともやっている、資料を貸出しするだけではないということで関係機関と連携した、新たな取り組みにも挑戦していきたいと考えている。

【事務局】

視聴覚資料に関して、今はオーテピアにしかない。分館・分室には春野に少しあったりするが、オーテピアの視聴覚資料を一度分館・分室に持っていったら、いいのではないかとということで、リストアップをして下知分館にオーテピアの視聴覚資料です、借りられますということをやったら、大変好評だった。そういう形で、どこかやりませんかと本館から声掛けした時にはあまり希望が出なかったが、下知分館での取り組みがすごく効果があったので、業務協議研修会でも発表していただいた。視聴覚資料もお貸しできるということで、資料の交流を図っていききたい。分館・分室それぞれの課題を考えながら取り組んでいきたい。

非正規職員について、本館の会計年度任用職員は、高知市でカウンターの職員を雇い入れしている。３年更新ができるようになって、次はまた募集をするが、再応募をしてくれたら、期間を空けずにそのまま採用できるという制度になっ

ている。以前は1年で切れていた臨時職員が、本当に長く来ていただくことで、そういう職員の知識も技術もどんどん重なっていったというのもある。

本館の職員もライフサイクルの中で、産休・育休もあり、カウンター職員もそういうことがある。その中で、4階の職員は、基本的に通常のカウンターローテーションというのには、入っていないが、やはり長期休暇、研修、アウトリーチにも行かないといけないとなると、カウンターを回さないといけない。それをどう回すかとなったときに、どうしてもシフトが組めないことが出てきたので、4階の司書にも、2階、3階のカウンターのローテーションに入っていただくような運営をこれから始めるところとなっている。夜のシフトには入っていただいていたこともあるが、日中もそういう形で、お互いにフォローしながらやっていくように、運営しながらの変化がある。

【委員】

会議の内容の変更について。

続いて第2の議題に移らなければいけないが、予定されていた時間が迫っているので、協議時間を省略させていただき、ポイントだけ簡単に、事務局側から説明をいただきたい。

コメント等はすでにいただいている部分も多いと思うので、ぜひにということであればまたメール等その他で、事務局側と連絡を取っていただければと思う。

<事務局 議事2説明>

【委員】

最初に申し上げたとおり協議の時間が取れないので、ご意見等は、メール等を利用して直接事務局側にご連絡を。

【委員】

本当はきちんと聞いて、きちんとコメントしないといけないこと。

今せっかく説明していただいたが、できたら12月16日の研修時にもう一度、今の部分も含めて、時間が2時間半で足りないようだったら延ばしてもいい。せっかくスライドも作っていただいたのが、走って終わってしまったというのは非常にもったいないと思うので、12月16日でできないか検討してほしい。

研修時間の2時間半が、例えば3時間でいけるということなら、私個人としてはそれに合わせて対応したいと思う。できたら研修時にきちんと聞いて、きちんとディスカッションもできる、という形をとれたら、そういうふうに持っていただきたい。

【委員】

委員の方からご意見をいただいたので、実施の方法、よろしくをお願いをする。作成資料がきちんと評価されることが、作成者にとって一番大事なことだろう

と思う。その点を重々ご理解いただければと思う。

●PDCA

これから実際の計画実施の活動が行われるが、一番大事なのは委員の指摘もあったが、今自分がやっていることが、PDCAサイクルの中のどれに当たるかを常に意識せざるをえないという点がまず一つポイントだろう。

利用者へサービスはいろいろ提供するが、サービスに関する反応、対応、周知度のチェックは、このレベルの段階に入るだろうと思う。それが一番大事で、サービスに対する評価については、やはりフィードバックを常に注意しておく。これが二つ目の大きなポイントだろう。

当たり前のことかもしれないが、かなり高度な計画を実施しなければいけないので、スタッフのスキルアップが不可欠だと思う。とりわけ、どういう方向のスキルアップがいるんだろう、必要なんだろうかという方向性に関する、スタッフ全員の合意、方向性を確認しておく必要が、一番大事だろうと思う。

もちろんDX化対応は当然であり、サービス向上のための情報収集、分析力の向上、一番大事な分析、それから研究に基づくプランの立案とそのプランの提案能力。私はこう考える、こういうプラン、根拠はこれであるという、具体的なプランの提案能力の向上が一番望まれるのではないかと思った。

●多文化サービス、日本語教育

今後また様々な関係機関との交渉が要るだろうと思うが、極めて簡単なところでの指摘もあった。実際に高知で暮らしている外国の方々は一体どういう気持ちなのか。正直言って外国で一人暮らしをしたりするのは、かなり心細い。図書館へ行っても、言葉が通じない、読めない。情報がどこから出るんだろう。職場に行っても、訳がわからない言葉が使われたりするが、これは非常にメンタル面で応えるので、やはりそういう人に対してどういう情報が一番必要だろうかということを考えるところからスタートしていただきたい。

いろいろな外国の方がおいでになるし、どこの国からの方が多いかというのはその地域の特性があるので、やはり高知県でたくさん暮らしている外国の方を主たるターゲットにするというのが自然だろうと思う。

もう一つは、言葉だけが独り歩きするのではなく、言葉は文化の一部なので、要するに、日本の文化と相手の文化の理解というのが必要になるだろう。もちろんこのためには、人と予算の問題は、切っても切り離せないもので、そのあたりの行政の働きかけも必要だろう。

図書館が用意すべきものとしては、教える側のための教材、それから学ぶ人にとっての教科書の類。これは最低限で、できれば例えばいろいろなビデオ教材のようなものが、それこそオンデマンドのような形で学習者に利用できる環境を整えてあげるのがいいのではないかと思う。

●バリアフリーサービス

バリアフリーの問題があったが、自分が高齢者になってくるにつれて、高齢者はやはりバリアに取り囲まれてしまうのではないかという気もする。だから、子ども読書計画を作ったときに思ったが、高齢者のための読書計画があってもいいのではないかと思う。高齢になればなるほど、実際図書館へ来て、図書を読むということがだんだん難しくなってくる。図書館利用に困難がある人という、カテゴリーに近づいていくのが現状。例えば、目で文字を追うのが億劫だが、本は読みたいのであれば、高齢者向けの読み聞かせ、読み上げがあってもいいような気もする。これは、自分の身を振り返っての一つの方向性を示したもの。

以上、委員から非常にたくさんの意見、貴重な意見をいただいたので、事務局はこれを十分に踏まえて、これからの図書館運営、サービス計画の実施をしていただくようお願いする。
それでは議事の３その他について、事務局の方からお願いする。

【事務局】

資料７。

今後のスケジュール。

前回の委員会までは第２期計画について、第１期の総括が議事に入っていたが、今回からは通常のサービス取り組みの実施状況の点検評価ということになっている。

来年度の委員会は６月と１０月の開催を予定している。

委員から、１２月のことでお話があったが、１２月の第３金曜日に、本日の議事２のような形で、サービスを掘り下げた形で担当が説明し、齋藤委員、常世田委員からご意見を伺うという研修を予定している。

(以上)